



Title	近代ドイツの作家連盟(3) : 「ペンで生きる」職業は一つか？
Author(s)	前原, 真吾; MAEHARA, Shingo
Citation	独語独文学科研究年報, 25, 34-48
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26091
Type	departmental bulletin paper
File Information	25_P34-48.pdf



近代ドイツの作家連盟（3） 「ペンで生きる」職業は一つか？

前原 真吾

はじめに

前回まで二回にわたって、「近代ドイツの作家連盟」というテーマのもとで、作家を個人としてだけでなく社会集団として観察することの意味について、いくつかの考察を行ってきた。また、教養市民という歴史的な概念によって把握される社会層と、テキストを生産することで人間の世界観を形成するような職業との間の相補的な関係について、社会的、歴史的な観点から考察を行ってきた。しかしこれまでは、文章を書くことで収入を得るといった職業の中でも、特に評論家や文芸作家という側面にのみ注目していた。従って今回からは、記者あるいはジャーナリストという、創作活動よりも主として — 現代的な感覚では — 情報伝達や報道を旨とするようなテキスト生産者の別の側面にも、いくらか目を向けてみようと思う。ジャーナリストたちの活動は、同じ著述業の中でも、詩人や小説家、劇作家、評論家などの活動とは異なって、確かに文学史や作家研究では体系的に扱われることがない。またもちろん本論でも、考察の中心は依然として文学の領域で活動した作家たちであることに変わりはないし、取り上げる発言も主として彼らによるものである。しかしながら、作家という存在について社会史的なアプローチを試みようとする場合には、ジャーナリズムの領域を完全に排除することは不可能である。なぜならば、ここで考察対象となっている作家たちの多くは、同時にジャーナリストとしても活動していたからであり、また、これまでに取り上げてきた教養市民的職業の専門職化と出版産業の全般的な変化発展の只中であって、やはりジャーナリストにも、その同じ時代に独自の団体・組織を形成し、「他の作家たち」との差異化を推し進めた、という歴史が存在するからである。そして、この歴史に注目することによって、もっぱらジャーナリズムの領域で活動した人々と、文学の領域に属した人々との間に生じていったであろう差違が、いかなる意味を持っていたのかを明らかにしようと思われるからである。

そこで本論では、「ペンで生きる」職業の統一性について、著述業とジャーナリズムに対する意見や見解のいくつかを手がかりとして問題の所在を探り、著述業の内部で進行した変化の歴史的な意味について検討してみようと思う。

1. Wir Schriftstellerstand ?

著述業が全体として法的にも社会的にもまだ未発達な状態にあった 1880 年代に、いかなる団体・組織にも属さない独立した発言の場として、文章を書くことを職業としている人々のための専門紙が創刊された。『ドイツ作家新聞』»Deutsche Schriftsteller-Zeitung« である。そこでは著作権法、検閲制度、貸本屋や出版人との契約関係、ストライキなど、著述業と出版産業をめぐる様々な問題を論じ合い、著述業全体の利益を追求していくことがプログラムとして掲げられたのであるが、とりわけ中心となったのは、「ペンで生きる」人々、文章を書いて収入を得ていこうとする人々の間に、共通の基盤となるべき職業意識を確立することであった¹⁾。この『作家新聞』の創刊者は、現在では『ドイツ文学カレンダー』»Kürschners Deutscher Literatur Kalender« の出版人として有名な Joseph Kürschner である。Kürschner 本人は、様々な出版物の編者としては名前を遺しているが、独自の文学作品と呼びうる著作をあまり創作していないために、ドイツ文学史の上では作家として言及されることがほとんどない。しかし彼は、ドイツ文学界のデータベース、人名年鑑でもある『文学カレンダー』と、「ペンで生きる」人々のためだけの言論機関として毎月二回発行された『作家新聞』という二つの強力な出版物の編集権を一手に握ることで、1880 年代に活動していたドイツ語圏の作家・詩人・ジャーナリストたちの全体像を把握し、また彼らを主導して一つの社会集団へ統合しようとさえ試みた、活動的な人物であった。実際に、『作家新聞』紙上で彼が行った批判や扇動をきっかけとして、Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband (ADSV、最初の全ドイツ作家連盟) からの Deutscher Schriftsteller Verein (DSchV) の分離が引き起こされており、また、その後に両連盟が Deutscher Schriftsteller-Verband (DSV) へと融合した際にも、『作家新聞』紙上で数多くの議論を通じて、融合問題の是非が何度も検討されているのである²⁾。このような『作家新聞』を創刊するにあたって、1885 年 1 月の第 1 号において、Kürschner はまず著述業の特異性を次のように評した：

»Die Eigenart des litterarischen Berufs: daß die meisten seiner Angehörigen erst auf Umwegen zu ihm kommen und daß der Schriftstellerstand nur ein geringes Alter hat, [...]«³⁾

そして、これが従来まで「不安定な職業」であることのいいわけとされてきた、という見解を示し、引き続いて、次のような言葉で『作家新聞』の存在意義を提示するのである：

»Aber sollen wir [...] nicht endlich daran denken, eine sichere Basis unter die Füße zu bekommen, zielbewußt unsere Interessen zu vertreten? Dazu soll die “Deutsche Schriftsteller-

Zeitung” beitragen helfen, indem sie unterrichtet und aufklärt, sozusagen die Politik des Standes treibt, ohne sich dabei dem Gaffen müßiger Zuschauer auszusetzen – ‘ganz unter uns’. Jeder soll mitreden können, der etwas zu sagen hat, ohne Rücksicht auf seine äußere Stellung in der litterarischen Welt.«

文筆活動を専門的な職業として確立しようとする 1880 年代の運動は、全ドイツ作家連盟の成立と『文学カレンダー』の創刊（どちらも 1878 年、カレンダーの創刊者は Heinrich Hart と Julius Hart）によって始められた。Kürschner はこの運動を背景として、『作家新聞』を発行することによって、「職業として文章を書く人々の全体＝我々」からなる一つの Stand, Schriftstellerstand を確立していこう、と宣言したわけである。もっとも最終的には、この Kürschner の気負いも、全体としての専門職化の気運も、作家連盟の活動停止とあいまって、1890 年代に入る頃には成果を挙げないままに衰退してしまう。その歴史的な結末については、本論に先行する論文の中で述べたとおりである⁴⁾。しかしここでは、その結果だけを取り上げて、結局すべては無駄な努力でありました、などと論じることが目的なのではない。注目すべきは、上記の引用文中において Kürschner 自身の手で強調されている箇所 – »ganz unter uns« – である。

「我々」という表現は、Kürschner のものに限らず、職業問題を論じる当時の文章には頻繁に現われる。というよりも、読者・視聴者を巻き込んで「我々・私たち」などと称するのは、実際にはきわめて一般的な表現方法の一つでさえある。しかしながら、ここで用いられている「完全に我々だけで」という言葉には、読んでいるあなたたちも私と同じ Schriftsteller じゃあないかと同業者意識を掻き立てながら、かつ、議論に同調しない人々を論理だけでなく感情にも訴えて巻き込んでいこうと目論んでいる、というだけではすまされない、複雑な含みがある。

まず第一は、次に続く言葉からも分かることだが、権威の有無、貴賤、活動内容あるいは立場や主義の違いによって、差別し合うのをやめるべきだ、という主張である。これは、最初の作家連盟 ADSV が、入会条件や連盟内部での行政上の権力構造という点で非常に保守的な組織であったことと関係している。この点を追求していった結果として、『作家新聞』の講読者層を基盤とする、より開放的で包容力のある新しい組織 DSchV が設立されるに至ったわけである⁵⁾。

第二は、ドイツ・ジャーナリスト会議およびドイツ作家会議の問題である。まず前者についてであるが、会議に出席し、発言することを許されていたのは、有力な新聞の出版社あるいは新聞社に正式に雇用されていた編集者と、その出版企業の代表のみであった⁶⁾。つまり、雇用されていない「フリー」の作家やジャーナリストはいうまでもなく、小規模な新聞・雑誌の編集者も、会議からは完全に締め出されていたわけである。加えて、『ド

『ドイツ作家新聞』創刊前の1883年度を最後に、会議そのものが開催されなくなっていた。ジャーナリストたちにとっては、自らの職業上の問題について、公共の場で意見交換をする可能性自体が失われていたのである。次にドイツ作家会議についてであるが、こちらは文学の活動領域に属する作家や評論家が中心であり、また作家以外にも多くの出版人（出版社組合の代表をも含めて）や各界の著名人、学者、官吏などが訪れていた。このため、会議で職業上のトラブルや経済問題その他の事態についての不満を表明することには、人間関係や雇用条件を害する、あるいは社会的信用を落とすかもしれない、という危険が伴っていたのである。もちろんこの危険性は、常に雇用者が同席したジャーナリスト会議にも、同様に存在していた。こういった文脈の中で、「ohne sich dabei dem Gaffen müßiger Zuschauer auszusetzen» という皮肉な表現を伴った »ganz unter uns« という言葉が発せられているのである。

さて、「完全に我々だけで」の議論や意見交換を始めてから一年後、創刊二年目に入る『ドイツ作家新聞』を宣伝するために無料で配られた（実際には『ドイツ文学カレンダー』の表紙の裏側に張り付けられた）見本号において、Kürschner は今度は次のように述べた：

»Sie(=Schriftsteller-Zeitung) zuerst bot in umfassendster Weise die Möglichkeit eines Gedankenaustausches in beruflichen und Fachfragen, wie er vordem nicht bekannt war. Die “Deutsche Schriftsteller-Zeitung” ist daher in einer Kritik nicht mit Unrecht ein ‘permanentener Schriftstellertag’ genannt worden, vor dem sie aber den Vorzug hat, daß jeder an ihm teilnehmen und jeder -- sich aussprechen kann. [...] Sie wird [...] das eine Ziel hoch halten: unserem Stande und der Sache der Litteratur zu nützen ohne Haß und ohne Liebe für die Person, ohne selbstische Absichten.«¹⁾

すぐに気がつくのは、「常設の作家会議」という評価を受けたことを、誇らしげに掲げている部分である。また一年前の言葉と比較してみると、『作家新聞』には誰でも参加できるし、誰でも言いたいことを言える、というこの宣伝文句は、多くの購読者や執筆者、協賛者を、同業者すなわち「我々」の間に見い出すことができた、という Kürschner の自信の現われと見なすことができる。上記引用箇所少し後の方に、さらに次のような一文が続いているのである：

»Die “Deutsche Schriftsteller-Zeitung” darf unter ihren vielen Errungenschaften vor allem mit Stolz die bisher von keinem journalistischen und sonstigem Organe erzielte Anteilnahme großer Schriftstellerkreise an den idealen und materiellen Berufsinteressen hervorheben.«

少なくともこれらの言葉を見るかぎりにおいては、»unser Stand« の確立と »ganz unter uns« の実現が、さらには文筆活動を職業として整備していこうとする運動が、この一年の間に大いに進展し、またその後もさぞかし促進されることになったであろうとの期待を抱かせる。しかし現実にはそうではなかった。まず、先に述べたジャーナリスト会議の休止に続いて、1887年度のドレスデンを最後に、ついにドイツ作家会議も開催されなくなった。作家会議はもともと ADSV の主宰により催されていたのであるが、融合によって同連盟が消滅したために、同時に終わりを迎えることとなったのである。また新しい連盟 DSV は「ペンで生きる」人々の全体ではなく、会員となった人間の利権だけを代表する組織であった⁹⁾。そして「常設の」と謳われた『作家新聞』も、1888年には発刊が終わってしまう。わずか三年あまりの寿命であった。

先の拙論においては、専門職化を目指すドイツ作家たちの運動が挫折あるいは鎮静化した原因に関して、基本的には「文学産業のさらなる進展とともに、出版人や雑誌編集人の下請けとして職人化・産業労働者化した作家・文筆家たちがドイツ各地で無数に出現」⁹⁾したことに起因していたのではないかと、著述業に従事する人間たちが、全体として、教養市民と労働者という二つの極を持つことになってしまったためではないかと想定した。しかしこれは、職業資格の設定や仕事内容の規格化が可能かどうか、すなわち、作家が官吏、教員、医師や弁護士などと同等な職業になりえるか、という、まさに「専門職化」の問題に限定して考えた場合の仮説であって、必ずしも Kürschner が目指したような »unser Stand« や »ganz unter uns« の実現を妨げる要因とは考えられない。「ペンで生きる」人々の内部で、資産を持つ者と持たない者が、それぞれに異なった職業集団を形成するわけではないし、また著述業に就いた無産者が後に裕福になったときに - これは成功した作家、著述家にはよくあることだが -、その職業の範疇が別なものとなっている、などということもないのである¹⁰⁾。さらに、文筆活動は個々人の世界観・価値観や能力、その時々的外的な強制力や規範体系などに相応して各人固有な形で行われる、あるいは、書くとはそもそも個人で行なう活動である、などといった、著述業が持っている基本的に個別化へ向かうとする作業上の傾向に関しても、同様なことが言えるであろう。こういった特性のゆえに、同業者会議そのものが消滅する必然性はないのである。むしろ日常の作業が個人的なものであるほどに、作家会議のような機会が必要になるとさえ考えられるだろう。しかし、それでは、文章を書く人間たちが職業に基づく一つの社会集団を形成しえなかった背景には、いったいどのような状況が存在していたのか。

まず考えられるのは、社会的に強い影響力を持つ作家たちの中に、Wir Schriftstellerstand の存在自体を否定する者がいた、ということである。»Meiner Meinung nach gibt es gar keinen Schriftsteller-Stand und wird auch nie einen geben.«¹¹⁾ 最初の作家連盟が結成されたときに、このように言っただけなのは、Wilhelm Raabe であった。しかし、この Raabe のような意見

の持ち主たちは、実際には個人的に組織化や集会に参加しなかっただけである。彼らが連盟の結成や作家会議・ジャーナリスト会議の開催を積極的に妨害したというわけではなかった。

もう一つ想定できるのは、統合されるのを嫌って、あるいは嫌われて、独自の方向へ進もうとする集団が発生し、これが *Schriftstellerstand* の形成を阻害した、という状況である。この点について観察してみると、1880年代当時、評論や小説、演劇、詩作などといった活動領域においては、「ペンで生きる」人々の全体を分裂させるほどに大きな差異は生じていなかった。もちろん、美学・創作上の主義や傾向に関しての様々な対立関係は存在していたが、これはいつの時代でも同じことであって、新たな「職種」の分離・成立を必要とする要因ではない。単なる流派の違いでしかない。しかし、こういった文芸あるいは創作活動とはまったく別の次元においては、「ペンで生きる」人々の間で差異化が進行していた。それは「文字によって情報を伝達する」という活動の次元においてであった。著述業を二分する境界線が、ジャーナリズムの領域における活動内容の変化、価値観の変化に対する立場の違いから生じていたのである。問題の核心は、情報が商業的価値を有するようになっていたことにあった。1880年代は、ジャーナリズムの領域が言論から報道・情報伝達へと急速に役割を変えつつあった、まさにその過渡期にあたっていた。この変化が、「完全に我々だけ」の職業集団を形成しようと試みたときに、「ペンで生きる」人々にとって大きな障壁となっていたのである。

そこで次章では、このジャーナリズムの変化に対する当時の見解のいくつかを検討し、その発言者たちが、各々どのような立場を代表していたのかを示してみようと思う。

2. 情報産業への反感

Joseph Kürschner によって創刊された『作家新聞』は、少なくともこの創刊者の意図では、「ペンで生きる」人々の全体を包含するものであった。しかし、文芸作家たちのジャーナリズムに対する反感は、すでにこの同じ『作家新聞』の第1号において、Hermann Bahr によって記された批判の文章によって顕在化していた。Hermann Bahr は »Das Grundübel des Journalismus« と題されたそのコラムにおいて、ジャーナリズムの退廃と害悪を無数に並べ立て、現在はあらゆる罪業が頂点に到達していると述べた後、その当時の社会の諸悪の根源は、新聞の商業的性格である、と断罪を行なっている：

»Sie(=Presse) ist die unentbehrliche und unermüdliche, jederzeit bereite und jederzeit getreue Helfershelferin jeder Art von Bank- und Börsenhumbug[...]. Dieses gemeinsame

Grundübel[...] ist der geschäftliche Charakter der Presse.«¹²⁾

さらに続けて述べられるのは、あるべき理想のジャーナリズムの姿、かつて父親の世代がその自由のために闘ったという、公共の言論機関としての新聞である：

»Man muß Mittel und Wege suchen, die Zeitungen ihres geschäftlichen Charakters zu entkleiden, sie aus spekulativen Unternehmungen, die sie heute sind, wieder zu dem zu machen, was sie einst waren und sein sollen, zu Trägerinnen der öffentlichen Meinung.«

そして最後に、ジャーナリズム業界の自助努力では、彼の言う理想の新聞を実現するためにはまったく不足であるとして、»Ich verlange dazu den staatlichen Zwang.« という言葉で、長い批判文を終えている。ほとんど嫌味としか言いようがない。しかし、これらの言葉から明らかになることもある。それは、ジャーナリズムとは意見や思想を公共の場に提示するものであり、自由な議論を行ない世論を形成していくものだ、といった固定観念の存在である。

市民的な新聞¹³⁾の場合、ナポレオン解放戦争後の反動期には、大学教授やギムナジウム教員などの文献学者、あるいは作家たちの手によって記事内容の選択や執筆、編集が行われており、新聞はまだ、政治的・社会的な問題を論じあうための言論機関の段階にあった。つまりジャーナリズムは、各領邦国家からの政治的自由を求めていた市民階級の、とりわけ学者や教養人の価値観・世界観と一つに結ばれ、これを表現していくための領域であった。Hermann Bahr が理想としたモデルは、ここに由来するものである。しかしながら、その後の新聞が情報を報道するための機関へと変化していくことになった過程において、この歴史的に培われた結合関係を切断しようとする動きが生じていた。様々な情報を迅速に伝達することが要求されるようになった結果として、教養人・文芸作家らによる啓蒙的な文章や、まわりくどいレトリックを用いる記事が、次第に新聞紙上から締め出されるようになっていた。そして、意見や思想ではなく、事実についての情報の方が、より大きな価値を持つ時代が始まっていたのである。

さて、Bahr によって「悪」であるとして徹底的に批判されているジャーナリズムの商業的性格であるが、実際には二つの問題を同時に含んでいる。一つは、売ればよいのだ、という商業主義の「悪さ」、そしてもう一つが、情報を商品として売りさばく情報産業の「悪さ」である。Bahr の批判の中では、どちらも商業的として括られているが、この二つはきちんと区別しておく必要がある。実は Bahr が行なったジャーナリズム批判の大部分は、読者を刺激すればよいと思っている、あるいはモラルに欠ける、社会秩序を乱す、などといった「売れば何でもよい」という傾向に対して向けられたものであった。しかし

内容の具体性に乏しい悪口や中傷であったため、ここでは細部を割愛している。一方、わずかしか言及されていないものの、作家とジャーナリストの問題に関して非常に重要であるのは、二つめの情報産業に関する箇所、最初に引用した言葉の、銀行や株式市場のためにせっせと働いている、という部分である。市場の動向に限らず、各国政府の政策や国際関係、あるいは事故や災害のニュースをも含めて、経済活動に影響し、証券・金融に関わる情報は、わずかな遅れが利益を大きく左右する。このために、泡沫会社乱立時代後の大不況を経た 1880 年代に入る頃には、どの新聞も、通信社から配信される最新の情報を購入し、可能な限り早いうちに、通信社から情報を買うことのできない講読者（とりわけ個人投資家）たちに販売することを余儀なくされていた¹⁴⁾。もちろん他のニュースについても、情報の速さと正確さが新聞の販売部数を左右する重要な要因となっていたことは言うまでもない。Bahr はこの状況を「売ればよいという傾向」と区別せずに批判しているのである。

こういった通信社の電信技術に対するジャーナリズムの従属的關係を嘆いていたのは、Hermann Bahr だけではない。同じ 1880 年代に新聞業界の現状を記録した Franz Walther という文献学者は、明確に通信社による情報配信という制度を非難し、また電信に従属して働く人間を蔑んで、ジャーナリストではなくレポーターと呼んでいる：

»Nicht der Schriftsteller, sondern der Berichterstatter spricht in der modernen Zeitung das entscheidende Wort, -- nicht der Gedanke, der den Schreibenden erfüllt, sondern der blaue Wolffsche Zettel, der ihm auf den Tisch gelegt wird, bedingt Wert und Inhalt der einzelnen Zeitungsnummer.«¹⁵⁾

「机の上に置かれた Wolff の青紙」とは、ドイツの Wolff 通信社で使用されていた通信用のメモ紙のことである。上記の Bahr と Walther による批判の是非を正確に検討するためには、先にこの Wolff 通信社とドイツのジャーナリズムとの関係を知っておく必要があるだろう。

まず、世界で最初の通信社であるが、これはフランスの Havas 社である。1825 年に Charles-Louis Havas がパリに通信事務所を開設し、1835 年に Havas 通信社と名称を改め、外交官、商人、金融業者などに各国の新聞を翻訳して情報を販売していた。この Havas は、モールス電信機が一般に使用開放された 1848 年からは、ヨーロッパ各国の首都間で情報を通信し、新聞社を顧客とするようになっていた。そして、一時期この通信社で勤務していたのが、ドイツ人 Bernhard Wolff であった。彼はベルリンに戻った後、1849 年に株式相場の情報を販売する事務所から始めて、1855 年には新聞社にニュース全般を売り込むようになった。これが二つめの Wolff 通信社 (Wolffsches Telegraphenbureau) である。三つめは

イギリスで、やはりかつて Havas で勤務していたユダヤ系ドイツ人 Paul Julius Reuter が、1851年にロンドンで経済情報を配信する事務所を開設し、1858年からは一般のニュースも新聞社に売り込むようになっていた。この三社は、1856年に株式相場の情報を相互に交換するという契約を取り結び、1859年にはニュース全般を通信交換することになり、そして1870年には、世界の全領域を三分割して、最終的にそれぞれの領域に対する独占的な配信権を持つ、という契約を取り結んだ。この契約によって、他の通信各社は、該当するこれら三社のいずれかを経由しなければ、どの国の通信社からも情報を入手することができないような状態に置かれることとなった¹⁰⁾。ドイツでいえば、Wolff 通信社を経由しなくては、経済情報だけではなく、あらゆる国際情報が入手不可能となる状態が生じていた。国内の情報についても、迅速に入手するためには、やはり Wolff 社との契約が必要であった。有線電信という技術的発展が、情報流通の制度に対して、逆に大きな規制を設けることになっていたのである。

ドイツの場合には、これに加えてさらに複雑な状況が生じていた。帝国成立以前の1865年、すでに電信の持つ価値に目をつけていたプロイセン政府の資本参加によって、Wolff 通信社は半官半民の企業、政府の影響下に置かれた機関となっていたのである。これは、ドイツ国内に流通する重要な情報が、プロイセン政府によって、また帝国成立後は帝国政府によって一方的に統制下に置かれ、都合の良い内容に修正されたり、隠されたり、歪められたりしていたことを意味している。そして、各新聞社の代表と編集員たちからなるドイツ・ジャーナリスト会議においては、このような状況を改善しようという意見が、1870年代に入る頃には何度も繰り返し議題として提案されていた。具体的には、プロイセン政府および帝国議会に対する情報配信の独占状態の改善要求であったり、またジャーナリスト会議独自の通信社を設立すべきである、といった改革案であった¹¹⁾。しかし、結局はどれも実現することがなかった。

このような状況を背景とすると、上記の批判者たち、特に Hermann Bahr は、時代の流れに従って必然的に役割と機能を変化させることになったジャーナリズムの現状を、正確に把握していなかったと見なすことができるだろう。ジャーナリストたちにとって、「事態を改善するために国家の圧力を求める」などという主張は論外であった。もちろん Bahr のような「作家」たちは、この変化のために、ジャーナリズムの世界で活躍する機会を大幅に削減されていた。そして彼らの代わりに、独自の思想を持つわけでもなく、巧みな文章を書くわけでもないジャーナリストや通信員、「レポーター」たちが、同業者として成り上がってもいた。恐らくこういった理由もあって、Bahr は教養人のものであった過去のジャーナリズムの世界をいっそう偏愛することになったのであろうし、また、この理想のジャーナリズムに相応しくない者を排除するために、国家権力の行使を要求したとも考えられるのである。とはいえ、それもやはり近視眼的な態度として受け取らねばならないで

あろう。

当然のことながら、この Hermann Bahr の批判に対しては、多くの反論が即座に『作家新聞』に寄せられた。Kürschner が第 2 号において、多くの反対意見があったことを報告し、その内容を次のようにまとめている：

»Der Bahrsche Artikel über das “Grundübel des Journalismus” in Nr.1 dieses Blattes hat die widersprechendsten Urteile erfahren. Leute die der Presse jahrelang nahe stehen haben sich für ihn, nicht minder Beteiligte gegen ihn erklärt[...] Nach dem einen hat Bahr den Nagel auf den Kopf getroffen, nach dem anderen weit übers Ziel hinausgeschossen. Nur für die Wiener Verhältnisse geben alle mehr oder minder die Richtigkeit der Vorwürfe zu.«¹⁸⁾

残念なことに個々の反論者については具体的に記されていないが、しかし「新聞業界に近いところにいる」人々であるから、大部分は新聞の編集者やジャーナリストであったと思われる。そして、少なくとも Kürschner が取りまとめた部分から推測できるのは、彼らが不当な批判を受けていると感じたのが、売ればよい、という商業主義の傾向に関する部分だけであったということである。つまり、情報そのものが商品として扱われること、通信社からの金融・経済情報に従属していることへの批判については、ほとんど注意が向けられていないことが、推測できるのである。これは Hermann Bahr の批判文が曖昧であったからか、あるいは、経済情報の取り扱いが、そもそも批判の対象になるなどは考えもつかないほどに、ジャーナリストにとって当たり前の仕事になっていたからであろうか。恐らく、両方の理由によるのであろう。

また、上記の箇所に続けて Kürschner 本人が、こちらは反論ではなく、逆に Bahr の意見におおむね賛同するという立場を表明していることから、もう一つ推測できることがある。それは、多くの作家たちの中で、「倫理の欠如した商業的性格」に対する嫌悪感が強く感じられるようになっていた、ということである。しかしながら、こういった商業主義の姿勢は、現実にはジャーナリズムの領域だけでなく、文学の領域においても同様に存在していた。売れない叙情詩よりも売れる娯楽小説を書かなくてはならない、文学も流行商品として魅力的でなければならない、そういう「文学の産業化」の状況がすでに成立していたことについては、先の拙論で示したとおりである¹⁹⁾。つまり、商業主義という批判は決して根拠のないものではなかったけれど、ジャーナリズムだけに向けられるべき性質のものでもなかったわけである。そこで差異化の原因として重要になってくるのが、やはり、情報を扱う産業としてのジャーナリズムである。

この状況に対して述べられた当時の作家の見解を、もう一つだけ引用しておく。自然主義者 Conrad Alberti の言葉であるが、これによって、「ペンで生きる」人々の内部に生じ

ていた差違が文芸作家たちにとってどのような意味を持っていたのかを、正確に認識することができるであろう：

»Zeitung und Buch stehen einander heute beinahe wie zwei feindliche Mächte gegenüber.«²⁰⁾

文学作品という永遠に残る著作物のメタファーとしての「本」と、時が経てばその価値を失って消滅していく時事情報のメタファーとしての「新聞」との対置には、思想家、芸術家あるいは創作者としての作家と、単なる情報の媒介者にすぎないジャーナリストという関係を見ることができる。もちろん Alberti 本人は、自分が前者であるという立場でこのように述べているわけである。ここから、「ペンで生きる」人々の間に境界線が引かれたのは、ジャーナリズムの商業的性格のゆえではなく、ジャーナリストたちが「ペン」で行なう作業そのものが、文芸作家たちの作業とは質的に異なったものに変化していたためであった、と言うことができるであろう。通信社から最新の情報を買入れ、それを記事に仕立てあげて講読者に売ることは、すでに当時のジャーナリストたちにとって自然な作業の流れであった。そして、こういった情報産業の従事者にとっては、取り扱うべき情報が独占され、政府の管轄下に置かれていたことの方が、はるかに重大な問題であった。これについては、ジャーナリスト会議において、通信社の問題が何度も議題に上がったことから明らかであろう。しかし、もう一方の「ペンで生きる」人々、文芸作家たちにとっては、この情報産業の成立はまったく別の意味を持っていた。それは、本来ならば自分たちに属していたはずの活動領域を侵食し、また、自分たちと同じ「ペンで生きる」人間と呼ぶには相応しくない人々、情報産業の労働者が大量に出現することを意味していた。かつてのジャーナリストは、教養ある作家や文献学者たちの職業であった。現在でも Schriftsteller という言葉が「新聞記者」をも意味しているのは、文章を書くという職業が一般に認知されるようになったころ、両者の間に違いが存在しなかったことに由来している²¹⁾。しかし 1880 年代のジャーナリストは、すでに情報産業の下請けという性格を帯び始めており、文芸作家たちとの差違は広がっていく一方となっていたのである。

3. 目的と手段の関係

ドイツ皇帝 Wilhelm II 世は、1890 年に開かれた学校教育のための会議に際して、次のような批判の言葉を表した：

»Da ist das Wort vom Abiturientenproletariat, welches wir haben. Die sämtlichen sog.

Hungerkandidaten, namentlich die Herren Journalisten, das sind vielfach verkommene Gymnasiasten, das ist Gefahr für uns.«²²⁾

まともな職業につけない高学歴者（アピトゥア取得者）が大量に出現していた不穏な状況について、施政者としての見解を述べたわけであるが、その高学歴プロレタリアートがあらゆるさまにジャーナリストと結びつけられていることは、大変な注目に値する。他の教養市民的職業の領域からあふれた多数の高学歴者たちが、「ペンで生きる」職業で活路を見い出そうとしてこの領域に流れ込んできていた事態については、すでに拙論で指摘したとおりである²³⁾。しかしながらこの Wilhelm II 世の言葉は、「ペンで生きる」職業の問題に、もう一つ別の局面が存在していたことをうかがわせるのである。それは、「unser Stand」と「ganz unter uns」のために腐心していたはずの Joseph Kürschner が、やはり 1890 年代の初頭にドイツの Schriftstellerstand の状況を皮肉っぽく評して述べた言葉と、表裏をなしている：

»Auf dem Gebiete der litterarischen Arbeit regelt sich Angebot und Nachfrage nicht. Ersteres überwiegt Letztere, die 'litterarische Reservearmee' wächst von Jahr zu Jahr. Auch der neue Jahrgang des vorliegenden Kalenders ist dafür ein Beweis.«²⁴⁾

つまり、文学の領域で何とか職にありつきたいという多数の「溢れ者たち」がいた、というのが Kürschner の見解であった。彼が判断の根拠としたのは、『文学カレンダー』の作家人名録の膨大なページ数である。この人名録への記載は、基本的には自己申告に基づいて行われていたのであるが、少なくともそこに記載されていたのは、作家であれ、ジャーナリストであれ、批評家であれ、何らかの形で「ペンで生きる」仕事をしている人間であった。ところが Kürschner は、そういった人々の多くをして、「文学の予備軍」、すなわち文学の領域で正規に仕事をしているのではない人間たち、と呼んでいるわけである。この Kürschner の言葉を先の Wilhelm II 世の発言と重ね合わせてみると、1880 年代が終わる頃には、作家、それも情報産業の下請けではない「作家」になりたいという願望を持ったジャーナリストたちが、世の中には大量に出現していた、という状況が見えてくる。そしてこのように考えた場合、ジャーナリストと文芸作家の間には、実は単純な職業上の差異化にとどまらない、非常に厄介な関係が存在していたことが分かるのである。つまり、ジャーナリストはそもそも「作家」になるための前段階に過ぎない存在であったのか、ジャーナリストは生涯の職業となりえないものであったのか、という問題である。

前章までに明らかにしてきたのは、情報産業の発展に従って、「ペンで生きる」職業の内部で、主として文学・文芸の領域で活動する作家と、ジャーナリズムの領域で活動する

ジャーナリストという二つの職業へと、分化が進んでいたということであった。ところが、差異化が進み、ジャーナリストが独立した職業として成立していくにつれて、ジャーナリストとは、「作家」が自分の創作活動で自活できるようになるまでの間、生計を立てていくための手段である、という考え方が発生してきた。ジャーナリストと作家の間の職業上の差違が、作家たちあるいは作家を目指す者たちにとっては、明らかな階級上の段差として現われるようになったのであった。それでは、もう一方のジャーナリストを生涯の職業としていた人々の側では、このような状況が生じてきたことを、そもそもどのように受けとめていたのであろうか。

この問題については、次回も引き続いてジャーナリストと作家の関係を考察していく予定であるので、そこで詳細に論じることにしたい。

注 釈

- 1) 職業意識を確立するために取られた方策の一つとして、*Schriftsteller* を名乗りたいものに対して「我々の *Stand* の名誉を守るため」に試験を課してはどうかという提案がある。Riffert, Julius: Was ist ein deutscher Schriftsteller? -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.5, Sp.109-110. この論者の想定した *Schriftsteller* の範疇には、*Journalist* が含まれていない。文脈からは、作為的に除外したと読むことができる。また、さらに別の方策として、ディレクタントの排斥が提案されている。文章を書く人々の中で、補集合としてのディレクタントを定義づければ、逆にプロフェッションとしての著述業がどのようなものか明らかになる、ということである。このために『ドイツ作家新聞』では、ディレクタントの定義に 100 マルクの懸賞が懸けられた。次の論説がそこで掲載されたものの一つである。
Groller, Balduin: Freischärler und Gratisblitzer. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.13, Sp.297-301. この論説では、書いた文章が上手でも下手でもどのような内容であっても、それで報酬を得ることが、責任をともなったプロフェッションとしての *Schriftsteller* の在り方であって、報酬を求めない、あるいは報酬に値しないものを書くのが、無責任なディレクタントである、という見解が示されている。ちなみにこの 100 マルクが懸賞額としては最高で、次が 75 マルク、内容は「不道德な出版物に書いている同僚に対してどのような態度を取ればよいか」というもの、最後は 50 マルクで「作家新聞のプログラムに関すること」となっている。Vgl. Preisausschreiben. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.10, Sp.227-228

- 2) Kürschner, J.: Leipzig oder Berlin? -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.3, Sp.57-60 / Kürschner, J.: Ein neuer Verein deutscher Schriftsteller. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.6, Sp.132-134 / Kürschner, J.: Was nun? -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.7, Sp.163-166 / Gerstmann, Adolf: Fusion oder nicht? -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.20, Sp.481-483 など多数。
- 3) Kürschner, J.: Zur Einführung! -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.1, Sp.2-3
- 4) 前原真吾: 近代ドイツの作家連盟(1). 十九世紀ドイツ帝国におけるその成立の社会的背景. -In: 独語独文学科研究年報 第23号, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会, 1996, p. 40, p. 48
- 5) 同上, p. 38. しかし、この新しい組織にジャーナリストを加入させるべきかどうか、またジャーナリストはそもそも Schriftsteller であるのか、といった議論を経た後のことではあった。Vgl. Groller, Balduin: Der deutsche Schriftsteller-Verein und die Journalisten. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.18, Sp.424-431
- 6) ドイツ・ジャーナリスト会議の規約には、次のように記されている: »I. Der Deutsche Journalistentag ist eine regelmäßig wiederkehrende Versammlung von Vertretern deutscher Zeitungen und Zeitschriften. [...] IV. Zur Mitgliederschaft sind die Redacteurs, Mitarbeiter, Herausgeber und Verleger von Zeitungen und Zeitschriften berechtigt.« Vgl. Statut des Deutschen Journalistentags. -In: Brückmann, Ariane: Journalistische Berufsorganisationen in Deutschland: Von den Anfängen bis zur Gründung des Reichsverbandes der Deutschen Presse, Böhlau, Wien;Köln;Weimar 1997, S.156-157
- 7) Kürschner, J.: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. Probenummern durch die Expedition in Stuttgart, 1886, Sp.2-3
- 8) 前原, 1996, p. 39. そもそも最初の連盟 ADSV がジャーナリストを排斥した組織であったが、DSV もこの方針に従っていた。
- 9) 同上, p. 47
- 10) 唯一考えられる職業上の差違は、Redakteur すなわち出版社に雇用された編集員と、そこへ執筆原稿を持ち込む作家たちとの、雇用・被雇用関係である。
- 11) Raabe, Wilhelm: Briefe 1842-1910, hrsg.v.W.Fehse, S.162
- 12) Bahr, Hermann: Das Grundübel des Journalismus. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg.1885 Nr.1, Sp.13-16
- 13) ここで「市民的」という言葉を用いたのは、社会主義者やカトリック教会の出版物、あるいは特定の職業内で流通した「業界紙」などとの差違を強調しておきた

- いたためである。
- 14) 決して、銀行や株式市場のために新聞が発行されていたわけではない。
 - 15) Kolkenbrock-Netz, Jutta: Fabrikation - Experiment - Schöpfung. Strategien Ästhetischer Legitimation im Naturalismus, Carl Winter, Heidelberg 1981, S.74 (Walther, Franz: Deutsches Zeitungswesen der Gegenwart. -In: Zeitfragen des christlichen Volkslebens, Bd.13, Heilbronn 1888, S.397)
 - 16) Vgl. Kolkenbrock-Netz, S.73 / 新井直之: 通信社. -In: 稲葉三千男 他編: 新聞学 (改訂第三版), 日本評論社, 1995. p. 95, 96
 - 17) Brückmann, S.47-48
 - 18) K(ürschner, J.): Press-Korruption. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. 1.Jg. 1885 Nr.2, Sp.51-52. この報告を受けて、H.Bahr は再度ジャーナリズム批判を書いている。Vgl. Bahr, Hermann: Zur Reform des Journalismus. -In: Deutsche Schriftsteller-Zeitung. Jg. 1885 Nr.11, Sp.253-256. 論旨はほとんど変わっていないが、批判の対象がジャーナリズムの商業性ではなく、今度は新聞の商品的性格 »geschäftlicher Warencharakter« と表現されている。ますます事態は混乱しているようである。
 - 19) 前原, 1996. p. 40-45
 - 20) Kolkenbrock-Netz, Jutta, S.77 (Alberti, Conrad: Zeitung und Buch. -In: Magazin der Literatur des In- und Auslandes, 55.Jg. Nr.13, 1886, S.193)
 - 21) 19世紀の前半には、文章を書くことが職業としてどれほど新しく、また Journalist と Schriftsteller がどれほど未分化な状態にあったのか、Heinrich Laube の回想からうかがうことができる。1830年代に帰省したおり、郷里の人々が彼の職業について言ったことについて、Laube は次のように記している: »Was ist er (H.Laube) eigentlich? ... Er schreibt Bücher und Zeitungen, hieß es. Der Stand war ihnen ganz neu; aber da ich mit Extrapost gekommen und sauber gekleidet war, so respektierten sie den Stand.« Vgl. Requate, Jörg: Journalismus als Beruf, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1995, S.127 (Laube, H.: Erinnerungen 1810-1840, Leipzig 1909, S.243)
 - 22) Vgl. Requate, S.157
 - 23) 前原真吾: 近代ドイツの作家連盟(2). 考察の理論的背景について. -In: 独語独文学科研究年報 第24号, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会, 1997, p. 48
 - 24) Kürschner, J.: Vorwort. -In: Ders.[Hg.]: Deutscher Litteraturkalender 1893, 15.Jg., Eisenach 1893, S.5

(博士後期課程／日本学術振興会 特別研究員)